

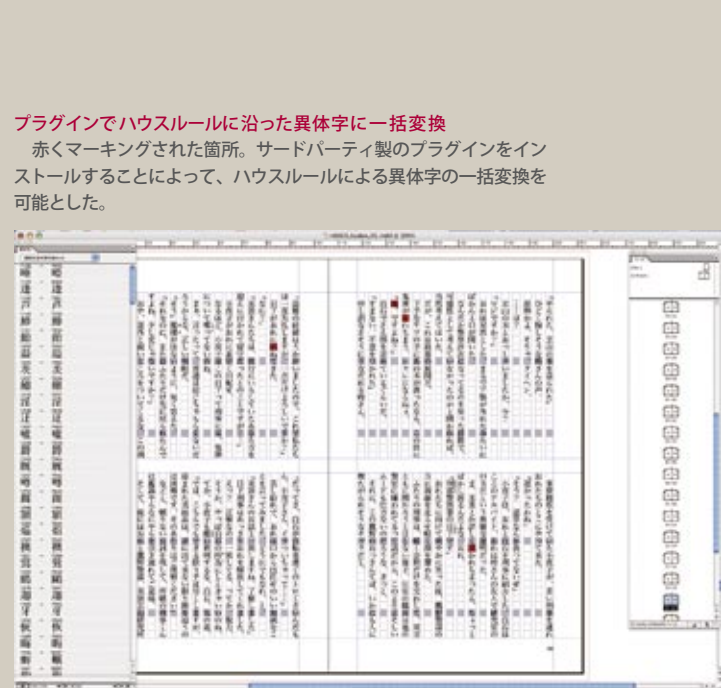
## 株式会社 講談社

## 導入してわかる新たな次世代DTP戦略

ソフトウェアが真に求められる性能とは？



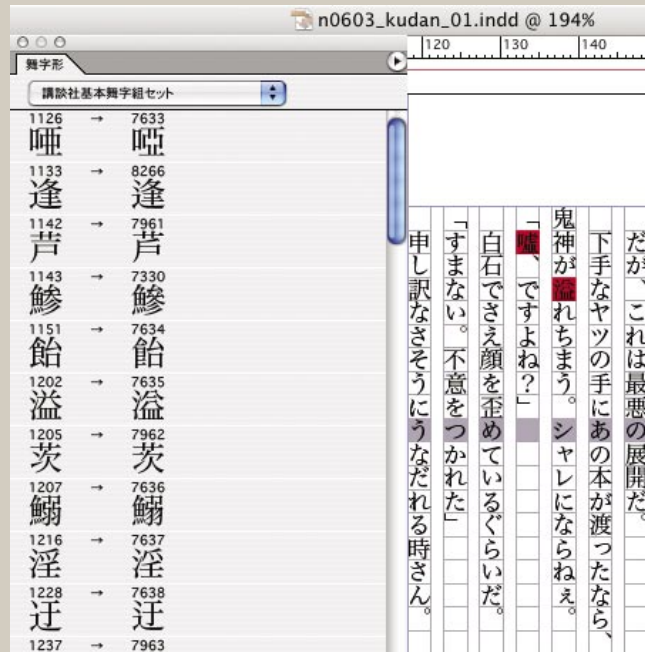
講談社が、これまでに DTP を受け入れなかったのは、様々な問題があったからだ。そのひとつに、大手出版社として受け継がれてきた組み版や文字へのこだわりをこれまでの DTP ソフトでは表現しきれないことがあった。現在では、Adobe® Creative Suite を採用し、独自のノウハウを蓄積しながら問題に取り組んでいる。



#### プラグインでハウスルールに沿った異体字に一括変換

赤くマーキングされた箇所。サードパーティ製のプラグインをインストールすることによって、ハウスルールによる異体字の一括変換を可能とした。

拡大図



## 講談社

### 編集者の“想い”が反映されるアプリケーションを求めて

少年マガジンをはじめとするコミック雑誌から、文芸誌、教育向け書籍など、幅広いジャンルの出版物を網羅する講談社では、ここ数年で急速なDTP化を成し遂げている。

講談社の編集現場へDTPが本格的に導入されたのは、2003年に創刊された文芸誌「ファウスト」からだ。「ファウスト」は、文章が主体であった文芸誌にビジュアル的なイラストを多用した新しい形態の文芸誌として創刊された。

この「ファウスト」は作品ごとにフォントを変えるなど、組み版への強い“想い”を持った雑誌であった。そのような編集者の“想い”を反映できる高品質なDTPソフトウェアとして採用されたものが、InDesign CSだった。

### ソフトウェアが使う人間に合わせられる柔軟性が必要

講談社がこれまでにDTPを採用しなかった理由のひとつは、従来のDTPソフトウェアには同社の組み版ルールに対して厳密に応えるだけの機能がなかったからだという。

InDesignを採用した理由として、同社デジタル事業局パブリッシングコーディネータの清野真史氏はこう語る。

「まず組み版のクオリティが従来のDTPソフトにくらべて高いことが決め手となりました。従来より、多くの出版社には「ハウスルール」と呼ばれる組み版に対する独自のルールが存在します。InDesignでは、禁則処理や文字間の空きなどを詳細に設定することができるので、写植時代のレイアウトアプリケーションであると感じました。」

講談社では、すでに多くの雑誌や書籍がInDesignを利用して制作されている。出版社独自のハウスルールを忠実に再現できることによって、高品質な版面をDTPで実現することが可能になったのだ。

### すべてのワークフローを把握し、トラブルに対処

講談社におけるDTP化への取り組みは決して早い方ではないが、「ファウスト」からはじまった「次世代DTP環境」への取り組みは無事に成功を収め、現在では、デジタル事業局DTPルームと業務局プリプレス部で発刊されるほぼすべての出版物がMac OS XとAdobe InDesign CS、そしてOpenTypeFontによる組み合わせで行われている。既存のDTPシステムを流用することはせずに、制作のすべてを内部で行うことによって、独自のノウハウを構築することから始めている。

「初めから多くの部分を外部に委託してしまうと、システムの欠点が見えなくなってしまいます。すべての行程を一度社内で行ってみることで改善すべき点があり、すべてを把握した時点で外部に委託するなどの効率を求めるべきだと考えました。」

従来のDTPソリューションを引き継ぐだけでは、個々のトラブルに対して、即座に対応できないと考えた結果だそうだが、この考えこそが、後にプラグインの共同開発へと繋がる結果となった。

### 出版社としての文字へのこだわり

ハウスルールは組み版だけの問題ではない。文字そのものにも出版社独自のハウスルールが存在するからだ。日本語には「辻（つじ）」のように、一点しんじょうと二点しんじょうの微妙な差を持つ文字が存在する。こうした異体字が存在する場合、どの文字を正字とするか各出版社によって異なっている。

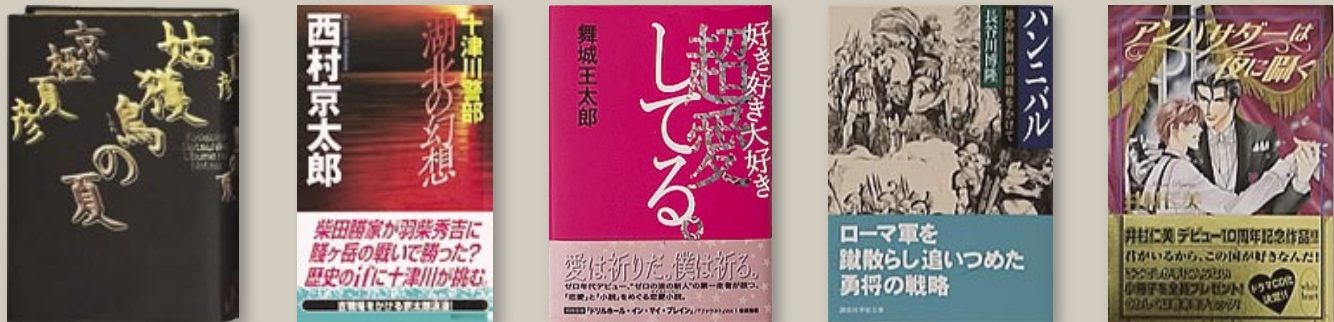
こうした文字の校正作業では、これまで、DTPオペレーターが文章の中から異体字を探し出し、ひとつひとつ変換しなければならなかった。こうした校正には熟練した職人が必要であり、時間が多く割かれる作業だ。

しかし、InDesignでは字形パレットから「JIS78字形」など異体字のセットを選択することができるので、文中の異体字を一括変換することができる。そのため、熟練した校正者を必要とせず、人員と作業時間の大幅な縮小を実現し、作業効率の向上と経費削減を実現することができた。

## 一度、すべてのワークフローを内部に取り入れることによって

## 改善すべき点を見いだすことができました。

デジタル事業局 パブリッシングコーディネータ 清野真史氏



### 会社データ

株式会社講談社

東京都文京区

<http://www.kodansha.co.jp/>

### チャレンジ

サードパーティとの連携によるInDesign用プラグインの共同開発を行う。これにより、校正作業における時間を大幅にカットすることができるようになる。

### ソリューション

レイアウトデザインから校正、入稿までを自社内で行う。編集者と作り手の連携を密にさせ、質の高い出版物の制作が可能となる。

### ベネフィット

専用プラグインの利用により、独自のハウスルールに柔軟な対応が可能となった。

### Tool Kit

- Adobe InDesign CS

- Adobe Photoshop CS

- Adobe Illustrator CS



### サードパーティとのプラグイン共同開発

しかし、さらなる効率を求めていくと、InDesignの機能だけでは解決しない問題もあった。InDesignで用意されている字形セットだけでは、出版社ごとに異なる正字ルールには対応しきれないからだ。この字形変換の仕組みを正字ルールごとにカスタマイズできれば、作業効率はさらに向上するはずだと清野氏は考えた。

そこで講談社では、フォントワークスジャパンの協力の元、異体字の検索置換を行うInDesign CS用のプラグインである「舞字形」を開発した。「舞字形」はInDesign CSへインストールすることによって、出版社ごとに制定された異体字への一括変換などが可能となる。InDesignだけでは不足する機能をプラグインによって補うことで、作業効率の向上を実現できたわけだ。

### ワークフローの向上を目指して

最後に、講談社における次世代DTPへの取り組みとして、清野氏は次のようなコメントを語った。

「結局のところ、どれだけいいソフトであっても、使う側のワークフローが悪ければ、マイナス面しか残りません。これからは、自社のノウハウを反映するためのプラグインを導入開発していくことも視野に含めて、問題をひとつひとつ解決し、ワークフローの向上につとめていきたいと思っています。そのために様々なパートナーの方々と協力していきたいと考えております。」

当然、ソフトウェアの効率化だけでなく、次世代のワークフローを構築できる人材の教育も忘れてはいけないと語ってくれた。